

修学旅行支援 実施報告書

理科教育専修 修士1回生 佐野 宏一郎

1. 実施日 平成30年12月6日(木)
2. 場所 奈良教育大学、ならまち
3. 参加者 東北学院中学校 3年生 16名 / 教員 2名
フィールドワーク : 佐野宏一郎(院生)・藤井愛華・畑下さつき・西條秀哉・西田朱音・北将伍・山本健太・狗飼菜々子(学部生)
オリエンテーション : 桑綾香(院生)・櫛乃里花(学部生)
企画・準備 : 谷垣徹(院生)、八木萌・奥平茜・仲村幸奈・林祐希(学部生)

4. 活動支援内容

平成30年12月6日に東北学院中学校の修学旅行支援として、修学旅行生16名とならまちでのフィールドワークを行った。「今に残されたものから、ならまちの歴史を知る」というテーマで、地名や道の区画などからならまちの歴史を探求する活動や、老舗にインタビューすることでならまちの伝統産業や文化を学ぶ活動を行った。大学生だけで企画を立ち上げ、当日は中学生を4つのグループに分け、それぞれのグループに2名の大学生がつき、案内役とすることで運営を行った。

本活動から、ならまちの魅力、フィールドワークでの学びの重要性、中学生の態度という3つを学ぶことができた。

1つ目のならまちの魅力について述べる。本活動を企画するにあたって、ならまちの歴史や伝統を学ぶ必要があった。私たちにとってならまちは、大学までの通学路といった生活空間の一部程度の認識であった。しかし、いつも何気なく通過していたならまちを改めて学ぶことによって、そこに巨大な寺院があったことや、かつて産業の中心として栄えていたことなど、新たな一面を発見した。そういった各時代の痕跡が道や地名などに確かに残っていることが、ならまちの魅力の一つである。歴史が地層のように積み重ねられ



雨の中、地名の由来を探求！

ることで、今がある。そういった街づくりの積み重ねが色々な証拠から読み取とれるということ、今回のフィールドワークから学ぶことができた。これは他の地域でもいえることなので、このような目を養って今後活かしていきたい。

2つ目のフィールドワークでの学びの重要性について述べる。本活動に参加した生徒の一人が「今までの中で一番修学旅行していた！」と言っていた。このように、フィールドワークでは直接現地に赴くことで体感的に学ぶことができる。本活動でも生徒のキラキラした眼差しや、どんどん意欲的になる姿に面白さを感じた。一方で、案内役として分かりやすく明快に伝えるということの難しさを実感した。コンピュータなどの機器使用に制限がかかる分、しっかりと内容を把握して、話者である責任を持たなくてはならない。そのため、事前学習の重要性を改めて実感した。

3つ目の中学生の態度について述べる。本企画では、参加した中学生から学ぶことも多かった。彼らの真剣に話を聞く態度や純粋に物事を探求していく姿勢は見習わなければならない。私たちは授業でも何か距離感を感じてしまうのか、たとえ好きな分野でも、どこか積極的に向かうことができない。しかし、本企画で中学生が見せてくれた、わからないことや気になることがあれば臆せず聞く、といった態度は、教員を目指す私たちにとって、忘れてはならない姿勢であることに再度気づかされた。

修学旅行支援は、単に中学生に奈良の魅力を伝えるだけが目的ではない。私たちが、楽しみながら学べるフィールドワークをつくる技術を身に付けることに繋がっているのである。また、その獲得のために学んだ奈良やならまちの知識は、将来教員になるにあたって自分の財産となるはずだ。このように、本活動は企画者側にも学ぶことがとても多いのである。今後も、能動型のフィールドワークや地元の人との関わりを持った企画をしていきたい。そして、ただ見て終わるだけの修学旅行から、一歩先に進んだ修学旅行を目指して活動を継続させたい。



真剣な態度で老舗にインタビュー



最後にみんなで一枚。最高の一日でした！